

## 先進校に学ぶキャリア教育の実践

# 生徒一人ひとりの個性に応じた自立を支援する すべての教員によるインクルーシブ教育

### — 長崎玉成高校(長崎・私立) —

発達の違いや心因性不登校の傾向がある生徒を対象とした「共育コース」を設置して7年。特徴的なカリキュラムや組織的な支援体制のもと、全教職員が生徒一人ひとりの個性と向き合うことで、小・中学校で学校生活が困難だった生徒も含め、ほとんどの生徒が学校生活を全うして卒業しています。

取材・文／藤崎雅子

#### 実践のKeyword

🔍 インクルーシブ教育 🔍 個別の教育支援計画 🔍 基礎学力定着 🔍 職業体験  
🔍 ソーシャルスキルトレーニング・ライフスキルトレーニング 🔍 授業のユニバーサルデザイン化 🔍 保護者対応

発達の偏りや心因性不登校に  
特化したコースを普通科に設置

私立長崎玉成高校は2009年、普通科に2つのコースを設置した。従来の普通科の延長線上にある「総合コース」と、特別支援教育に特化した「共育コース」だ。共育コースでは、「成績は良いが人とのコミュニケーションが苦手」「社会的な場面で話すことができない」「中学校時代は学校に行けなかった」など、発達の偏りや心因性不登校の傾向がみられる生徒が、1クラス定員20人の少人数、2人担任制のもので学んでいる。

少子化が急速に進むなか、共育コースの設置には「学校の生き残りをかけた学校改革」という側面もある。しかし、そのアプローチは、特進コース設置のような大学進学を軸としたものとは異なった。近年の同校入学生徒の多様化が目立つ状況に対し、「彼らに十分な配慮ある指導ができていくだろうか」という鬼塚謹吉校長の自省の念があったからだ。

「学校教育がもつ大きな責務として、いずれの高校も特別支援教育に取り組まなければならない時代」と鬼塚校長。一人ひとりの生徒の能力・適性・ニーズに合わせた細やかな配慮のもと対応する」という教育目標を設定し、特別な教育支援を必要としている生徒も共に学ぶインクルーシブ教育の推進に「一歩踏み出した」。

1クラスでスタートした共育コースの入学者率は、初年度から約2倍。希望者の

多さを受けて、14年度からは2クラス計40人の定員で対応している。

入学前の面談から始まる  
組織的な個別支援

同校は教員3人を「特別支援教育コーディネーター（以下コーディネーター）」として指名し、その教員を中心として特別支援教育のしくみや教員の啓発・研修を推進している。また、共育コース担任のほか、教育相談部やインクルーシブ教育研究主任の教員、および週3日来校するスクールカウンセラー（臨床心理士）と連携して、さまざまな個別ケースに対応する体制をとっている。

共育コース入学者への支援は、入学前の3月から始まる。入学予定者とその保護者に対し、1家族40分かけて「入学前親子面談」を実施。新担任のほか、教頭、コーディネーター、養護教諭が面談し、生徒に安心感と親しみをもってもらおうとともに、教職員は生徒を観察する。また、保護者に対しては学校側の教育方針や対応基準を伝え、「困った時は何でも相談に乗るので、お子さんを追い詰めないでください」と話す。さらに、入学者の中学校を訪問して、これまでの成長の様子や指導内容をヒアリング。それらの情報をまとめた「個人ファイル」を作成したうえで、生徒を受け入れる。教頭の上戸綾子先生は、「本校入学後の定着率が高いのは、初めにしっかり生徒観察と人間関係づくりをすることが大き



### School Data

普通科・生活技術科・福祉科・衛生看護科／1892年設立  
 ／生徒数406人(男子110人・女子296人)  
 進路状況(2015年3月末実績) 大学4人・短大3人・  
 専門学校36人・就職32人・同校衛生看護専門課程46人・その他8人  
 長崎市愛宕1-29-41  
 TEL 095-826-6322  
 URL http://www.tamaki.ac.jp/koukou/

### Outline

「実学の尊重」を教育方針とする女子校として創立。2007年度、校名変更とともに男女共学化。09年度、普通科をコース分けし、発達に偏りのある生徒や不登校傾向のある生徒を対象とした共育コースを新設。文部科学省や長崎県の委託事業も活用し、特別支援教育の研究・実践を推進してきた。13年度より文部科学省「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」指定校。第30回時事通信社「教育奨励賞」努力賞受賞。

図1 個別の教育支援計画

入学後は全教員で全校生徒の実態把握を実施。共育コースの全員とその他のクラスの気になる生徒について、個別の教育支援計画を作成する(図1)。また、日常の授業や生活の様子から「この生徒には特別な配慮が必要ではないか」と教員から問題提起があると、関係教職員数人で「ケース会議」を開いて対応策を検討する。それらの情報は全教職員で共有している。保護者の理解と連携を重要視する同校は、保護者に対する働きかけにも積極的だ。保護者との連携が必要だと判断されれば、担任やコーディネーターが保護者と話し合いの場をもつ。昨年度までコーディネーターを務めていた上戸教頭は、放課後は1日に1人と決めて時間を確保し、保護者が話し尽くすまでとこことん付き合った。また、生徒に厳しい指導を行う時は、事前に「これからこんなふうに叱りますか

図2 共育コースの学校設定教科(2015年度入学者)

教科	科目	主な内容	1年	2年	3年
研究	社会人入門講座	電卓技能検定試験などへの挑戦	2	2	-
	ベーシック	国語・数学・英語の基礎学習	3	3	3
	SST(ソーシャルスキルトレーニング)	社会生活スキル育成トレーニング	1	1	-
	LST(ライフスキルトレーニング)	就職に備えたトレーニング	-	-	1
	職業訓練	模擬会社運営、インターンシップなど	-	2	2

図3 SST・LSTの授業テーマ例(一部)

1年SST	<ul style="list-style-type: none"> <li>「めめごとになる時」ってどんな時?</li> <li>「ストレス」をコーピング(除去・緩和)しよう</li> <li>怒りの気持ちを伝えよう!</li> </ul>
2年SST	<ul style="list-style-type: none"> <li>「めめごと」だって解決できるさ</li> <li>言葉を使わないコミュニケーションを学ぼう</li> <li>「私の本当の気持ちを伝えたい」ロールプレイ</li> </ul>
3年LST	<ul style="list-style-type: none"> <li>班の仲間と協力し、コンセンサス法を学ぼう</li> <li>社会に適應する対人スキル・マナーを学ぼう</li> <li>ロールプレイで面接練習</li> </ul>

らフォローをお願いします」と保護者へ連絡。家庭と足並みをそろえることで指導効果を高めている。

**校内模擬会社運営で年間を通じて就業体験**

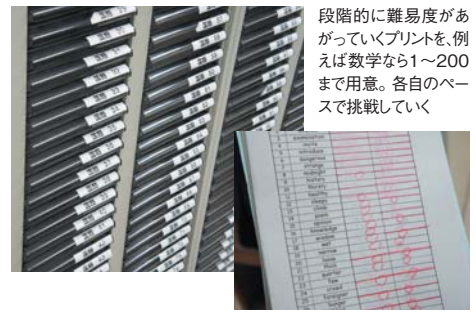
共育コースの単位数や使用する教科書、定期試験の問題などは総合コースと同じだが、カリキュラムには大きな特徴がある。普通教育に関する教科・科目に加え、学校設定教科「研究」を設置。基礎問題をドリル形式で解いてステップアップしていくことで小さな成功体験を積み「ベーシック」や、社会性を育むトレーニングを行う「SST」など、5科目を展開している(図2③)。

なかでもユニークなのが「職業訓練」という科目。共育コースの生徒全員が「社員」となって模擬会社「玉成ベーカーリー社」の運営を行っている。毎週水曜日に16種類、約350個のパンを焼き、昼休みに校内で販売。地域の高齢者を招く「福祉科高齢者サロン」や、同学園幼稚園にも焼ききたパンを提供し、異年齢コミュニケーションにも役立っている。また、3学年就職希望者を対象とした放課後の補習として、ビジネスマナーやパソコン実務などを体験する模擬会社「玉成OAワーク社」も運営している。この2社のねらいは、求人票を見て入社試験を受けるところから始まる、ひととりの就業体験をすることだ。

「以前から年5日間のインターンシップを実施していますが、もつと恒常的に職業体験させたい」と模擬会社を導入しました。陶器のような壊れ物と違って、パンなら失敗しても食べてしまえばよく、心の傷になる心配がありません。ふかふかの焼きたてパンで幼児や高齢者にも喜んでもらい、彼らの自信につながっています(上戸教頭)



ベーシック



段階的に難易度があがっていくプリントを、例えば数学なら1~200まで用意。各自のペースで挑戦していく

玉成OAワーク社



今年度は就職希望の3年生8人が受講。ビジネスマナー、パソコンやピッキング作業、金銭管理などを体験的に学習

玉成ベーカリー社



生徒は「入社試験」を経て入社する。1年生はまだ「見習い」。2年生はパン生地成型までを担当し、3年生が焼き上げと販売・会計を行う



授業やクラス運営を工夫  
優しさだけでなく厳しさも

共育コースには、「集中力が続かない」「ノートをとるのに時間がかかる」「パニックを起こしやすい」といった生徒もいるが、通級による指導は行っていない。保健室の利用も最小限にとどめ、クラスを居場所とすることを第一としている。

授業では、学習支援員を配置してサポート

SST(ソーシャルスキルトレーニング)



ロールプレイやゲームも交え、コミュニケーションや感情コントロールのトレーニングを行う



「サポートする一方で、各教員はどんな生徒も学びやすいようユニバーサルデザイン化に努めている。例えば、注意力の妨げとなる日直や連絡事項などの情報は黒板横のボードに集約。授業のはじめに「今日の予定」を示し、1時間の見通しを立てやすくする。板書を写す時間の取り方やプリントを工夫。人前で発表することを極端に恐れる生徒には、事前に簡単な問題を用意して本人に伝えておき、指名されて答え

られたという達成感をもたせる。このように各教員が試行錯誤しながら細やかな工夫をしている。

また、クラス運営でも生徒一人ひとりに合わせたさまざまな配慮がある。ある担任は、学級目標や学級通信でクラスの一体感を醸成するとともに、生徒の表情や言葉遣い、身なりに常にアンテナを張る。「少し表情が冴えないな」「さっきの言動はどういう意図から出たんだろう」と気になれなくなっていた生徒には、交換ノートのやりとりをすることで登校を安定させた。生徒が担任にしばしば悩みを話したり、相談をもちかけるのは、こうした毎日の積み重ねからくる安心感のあらわれといえる。インクルーシブ教育研究主任の袖崎敏昭先生はこう話す。

「インクルーシブ教育で大切なのは、必ずしも特別なシステムをつくることではなく、生徒たちの特別な教育的ニーズに気づいて、ちょっとした配慮や支援を積み重ねていくことかもしれません」

ただし、生徒への対応は「優しい」だけではない。入学後10カ月を過ぎると生徒も慣れてくるので、「そんな上から目線の言い方はよくない」「ハンディを言い訳にして努力しないのはいけない」とはつきり指摘したり、厳しく叱ることもあるという。その役割を主に担うのはコーディネーターだ。「発達の偏りは一見わからないことが多いため、社会に出たら特別扱いされません。だから今のうちに社会のルールや人とうまくやる方法をしっかり身につけさせたい。そのためには厳しくすることも指導の1つだと考えています」(上戸教頭)

特別支援学校で  
全教員が一日研修

実は、共育コース発足時、教員からは大きな反発があったという。しかし現在は、特定の担当者だけでなく、全教職員で特別支援教育に取り組むことが「当たり前」というムードがある。そんな変化の背景には、校長の強いリーダーシップのほか、教員研修の積み重ねがあった。

これまで毎年、全国の先進校や関係機関への視察に教員を派遣し、校内でも特別支援教育に関する講演会や研修会を年数回ずつ開催するなど、教員のスキルアップの機会を設けてきた(図4)。なかでもとりわけ効果的だったのが、市内にある特別支援学校における「一日研修」だという。5年間で全教員が体験。どの教員も多様な生徒への親身な指導を目の当たりにし、大いに刺激を受けて帰ってくるようだ。さらに、担任や授業担当として共育コースにかかわるなかで、「目の前の生徒たちのために」と考えるように。15年にはこれまでの実践について全教員で執筆した書籍の出版に至るほど、今やどの教員も熱い思いをもって取り組んでいる。特別支援教育の教員免許取得への挑戦にも積極的で、もうすぐ免許取得者は16人となる見込みだ。



インクルーシブ教育  
研究主任  
袖崎敏昭先生



教頭  
上戸綾子先生



校長  
鬼塚謹吉先生



共育コースの取り組みを  
中心にまとめた『特別支  
援教育とキャリア支援』  
(同成社)。各教科におけ  
る実践や特別支援教育  
Q&Aなど充実した内容

図4 特別支援教育に関する教員の  
スキルアップの機会(2014年度の例)

先進校・ 関係機関 視察	千葉県社会福祉法人光明会 「就職するなら明朗アカデミー」 発達障害の方のための就職応援企業 「Kaizen」東京都 長崎県内就労移行支援事業所見学3か所
公開セミナー 開催	「高等学校における対話を起点とする学校作り」 (講師：当時明星大学特任准教授・中田正敏氏) 「発達障がいのある生徒への ライフステージを通じた支援のあり方」 (講師：全国LD親の会元会長)
職員研修	「人権教育の指導の在り方」 (長崎県教育センター) 「人権教育 福永宅司 一人芝居 ～君をイジメから守る～」※生徒向け上演

### 発達への偏りが薄らぎ 不登校は解消

「毎日、ドラマのように色々なことがあり、驚かされ、時に落ち込み、多忙だったが、日に日に生徒の個性に驚かされるのではなく、『なるほど』と勉強させられ、かつそれが楽しく感じられるようになった」「無事に23名の進級が認められ、彼らは2年生になった。『やった』という達成感。大きな感動があった」—— 同校が出版した書籍にある教員の文章からはやりがいや伝わる。

同校で3年間を過ごすうち、不登校が解消されたり、特徴が薄くなったりする

生徒は多い。中学時代に心因性不登校だったある生徒は、同校入学後も精神的な苦痛から洗面所で嘔吐を繰り返していた。しかし半年後、他の生徒に「大丈夫、この学校だったらやっていけるから、教室に戻ろう」と声をかけていた。

自閉スペクトラム症の傾向が強かった別の生徒は、中学時代は教室で過ごすことが困難だった。しかし、同校では居場所が少しずつ保健室から教室へ。「自分が思っていたほど、人は私のことを気にしていなかった」と自分を客観視できるまでに。学年トップクラスの成績を取り、クラスのリーダーとして活躍する高校生活を過ごした。今は笑顔で専門学校に通っている。

高校途中での進路変更は、あってもごくわずか。ほとんどの生徒が3年間を全うして卒業する。しかし、卒業後の進路には困難が多い。共育コースの生徒は3分の2は進学、それ以外は就職する。特に、「社会人」として送り出さなくてはならない就職において課題が多い。

就職支援体制の強化のため、特別支援学校の進路指導主事やハローワークのスタッフを講師に招いて教員研修を年2回程度実施。袖崎先生は2級キャリア・コンサルタント技能士(国家資格)を取得。常駐する就職指導専門員や、長崎障害者職業センターのような外部機関とも連携して就職支援にあたっている。

さらに卒業後も、進学先や就職先から問い合わせがあればすぐに教員が駆けつけ、当該卒業生の特徴と対処方法について説明する。卒業1年後には追跡調査を実施して、一人ひとりの状態を確認している。

### Voice

#### 共育コース卒業生が在学時に発表した「ぼくの高校生活」

長崎玉成高校に入り、もう2年になります。僕は最初、玉成なんてどうでもいい、高校なんてどこでもいい、どうせ勉強できないし、行かなくてもいいと思っていました。中学卒業して働けるなら働こうと思っていました。そうしたら、中学の先生と母から玉成高校に行ってみないかと言われました。

今はここに来てよかったと思っています。なぜなら、玉成の先生方は僕たちのクラスのみんなを理解しようとしているのがわかったからです。僕は正直、できたばかりのクラスに期待していませんでした。だけど、先生方と話したり、勉強したりしていると、先生方が今までなかなか理解されなかった僕たちを理解しようとしているのがわかりました。僕たちにとって理解してくれる人がいることは、とても心の支えになります。そういう先生方がいるところだからよかった。ただ放っておかれる、遠ざけられる、対応を甘くされる。そういう場所じゃない。だから今、玉成高校でよかったと思えるようになりました。高校に行けたことで、たくさんのお会いがありました。特に友人には感謝しています。

今日は、せっかくこういう場をいただいたので聞いていただきたいことがあります。僕たちのような子どもたちがたくさんいますが、単に読み書きができないといっても、普通の人には理解してもらえません。発達障がいのことを勉強してくれる方はたくさんいるのですが、「勉強したから大丈夫」と、理解しているつもりの方が多いのではないのでしょうか。僕には、障がいだから仕方ない、だからできないだと諦めている人、見ないふりをしている人がいるように思います。みんなができないわけではありません。人より理解が遅いかもしれませんが、丁寧に教えていただいたら、できることはたくさんあると思います。今、目の前の子に真剣に向き合っているか考えてみてください。そして、このようなクラスをたくさん作ってください。よろしくお願いします。

※文科省委託事業成果報告会での発表。発表者は卒業後、専門学校に進学し、現在は鍼灸師として働いている

「挫折が大きなダメージとなる生徒たちには、『継続して就業できること』を見通した就職が大切です。出口を決めれば良いのではなく、その後の長い人生をいかに自分で自立して生きていけるかを考えながら指導にあたっています」(上戸教頭)

こうして手を尽くしていても、上戸教頭は「私たちがすべきことはまだ山のよう

にある」という認識だ。

「共育コース7年めとなった今でも新しいタイプの生徒との出会いがあり、前年までの経験では歯が立たないことも。でも、それで『大変だ』ではなく、『楽しもう』。私ひとりでは難しくても、みんなで相談してやっていけば大丈夫、という気持ちで取り組んでいます」(上戸教頭)

発達の偏りのある生徒が増えていくといわれる現在、同校のように特化したコースがない高校においても、この事例から多くのヒントが得られそう。